解説（堀田　穣　ほったゆたか／京都学園大学・教授）

紙芝居は、団塊の世代と呼ばれている人々（1947～1951 年生まれ）までにとって、街角に自転車に乗ってやって来て、拍子木を鳴らし、水あめを売って、手描きの、何時までも続く物語を毎日演じていた街頭紙芝居のことでした。あまりの人気に学校の先生たちが心配して、教室で静かに、教育的に見せることができる教育紙芝居を創りました。それが今も図書館や幼稚園・保育所にある、印刷された紙芝居です。街頭紙芝居と教育紙芝居は正反対の所もありましたが、共通点も多かったのです。その一つが、対話型メディアであるということです。教育紙芝居の裏には絵の説明が印刷されていますが、それをただ棒読みすれば良いわけではありません。

「これなんだ？」「森！」といった演じ手と聞き手のかけあいばかりでなく、静かに脚本を読んでいる場合でも、演じ手は描かれている絵を、自分のイメージの中で本物と感じていなければなりません。森が描かれていれば森の中、遠くに海が光れば「わあ！海だ」と心の中の劇場で演じなくてはおもしろくないのです。心の中のイメージは、聞き手の心の中に響きます。絵の裏に印刷された説明は、脚本なのです。脚本、戯曲は俳優によって肉体化されなくては生きてこないのが演劇、芝居です。紙芝居も形の上では俳優は絵の中なのですが、イメージと肉体は演じ手で実現されるのです。つまり心の中では俳優は演じ手になります。

この紙芝居は環境を考えるために制作されましたが、環境とは私たちの周りを取り囲んでいる条件です。演じ手は心の中でせいいっぱい大きな木や、気持ちの良い里をイメージすることで、聞き手の心のキャンパスにもそれを描くことを心がけてください。もちろん主人公は絵の中のタンタですが、演じ手はタンタの環境の、木や大気なのですから。

あらすじ

森でいちばん高い木のまわりで、クマくんやキツネさん、ウサギさん、ブタくん、タヌキのタンタがあそんでいました。そのうちみんなが木のぼりをはじめました。いちばん小さいタンタは、はじめはためらっていましたが、のぼってみるとおもしろいので、どんどんのぼりました。みんなはしんぱいしてとめるのですが、そのこえがとどかない高さまでのぼってしまい、とうとうてっぺんまで、一人でついてしまったのです。タンタはそこですばらしいけしきを見ましたが、ふと下を見るとその高いこと高いこと、とてもこわくなってしまいます。こわくておりられなくなってしまったタンタは目をつむって木にしがみついてしまいます。さあ、たいへん。このままタンタはだれかにたすけられなければ、ずうっと木にしがみついたままなのでしょうか？いいえ、タンタははげまされながら、いろいろなことを思い出しながら、自分で高い木からおりてきます。タンタをはげましたこえを、あなたも聞いてみませんか。